

平成7年(1995年)7月、十和田湖資源対策会議でお会いした十和田湖増殖漁協の組合長さんから「最近、産卵期でもないのに湖畔でヒメマスの群がよく見られる。初めてのことで一度見ていただきたい。」という興味深いお話を伺った。産卵期でもない時期に湖のヒメマスの群が見られるのはきわめて珍しいことなので、是非に見たいと思って翌日和井内にあるふ化場に案内していただいた。明治38年(1905年)に和井内貞行が産卵に戻ったヒメマスの群を発見して「われ幻の魚を見たり」と叫んだ歴史的な場所はおそらくその近くであろう。

十和田湖のヒメマスの原点とも言えるその場所は、木々の緑が水面に映えて殊の外神秘的に見えた。そして少しでも近くで見たいと思った私が水際に近づいた時、組合長さんが「ほら、あそこに黒く見えます。あれがそうです。」と湖面を指さした。最初は波の動きで判らなかつたが、よく見るとそこにはまるで水面に映る木陰のように魚群の黒い影が動いていた。それは感動の一瞬だった。そしてその大きな影は湖岸沿いにゆっくりと移動して行った。

周囲の景色と湖面から映るヒメマスの群の黒い影は90年前とあまり変わらないはずなので、私は和井内貞行が目にした光景と同じものを見ていることになる。そう思うとその時の思いが沸々と伝わって来るようだった。「われ幻の魚を見たり」を実体験した感動のひとつきだった。

でも、いつまでも感慨にふけてばかりはいられなかつた。

問題は二つあった。一つはその群が間違いなくヒメマスあることの確認であり、もう一つは産卵期でもない時期に何故水辺を群泳しているのかということである。その群がヒメマスか否かをその場で確認することが最良の方法であるが、私達は投網など漁具を用意していなかつた。絶好の機会なのに残念だと思った時、私達と一緒に魚を眺めていた近所の人が「あの魚ならふ化場の水路に沢山いるよ」と教えてくれたのである。半信半疑でふ化場の排水路に行ってみると、大量の魚が黒く群がっていてその一部が細い水路全体に重なり合うようにして流れの方向に向かって泳いでいた。

思いがけない協力を助けられ、借りてきたすくい網でその魚を捕まえて間違いなくヒメマスであることが確認できた。そのヒメマスは何れも体長が19センチ前後、体重50から80グラムの未成魚だったが、普通のヒメマスに比べると明らかにやせていた。丁度同じ頃、子の口からそれほど離れていない奥入瀬川で降海の途中と思われるヒメマスが多数観察されたという話も聞かれていた。

この時期に奥入瀬川に降下する魚の調査では、昭和46年(1971年)に6月23日が300尾、6月30日440尾、7月2日400尾がそれぞれ子の口付近に群泳するヒメマスが確認されていた¹⁾。また昭和47年(1972年)の同じ時期の調査で1年魚と推定されたヒメマスが捕獲さ

れていた¹⁾。子の口付近に群がるヒメマスと和井内の湖岸で回遊していたヒメマスが、その出現時期や魚の行動、そして魚の大きさ等共通点の多いことから湖から降下しようとしている魚の可能性が考えられたが、それ以上のことは判らなかった。

十和田湖から降下したヒメマスの行動は不明であるが、平成元年（1989年）10月31日に十和田市相坂のサケの捕獲場で遡上してきたベニザケが捕獲されたという記録がある。体長35センチの雄の成熟魚で青森県内水面水産試験場によってベニザケであることが確認されている。

奥入瀬川はベニザケの分布域ではないので、太平洋に降海したヒメマスが海洋生活を経て産卵回帰した可能性が考えられた。

産卵期でもない7月に湖畔でヒメマスの群が見られた年の翌年の平成8年（1996年）7月、再び十和田湖で同じように湖岸にヒメマスが群がる現象が観察された。それらの魚が前年ふ化場の排水路で捕まえた魚と同様にやせていたことから、放流尾数が多すぎて餌不足の状態になっているのではないかと懸念する声も聞かれるようになった。

十和田湖は山間にある美しい湖であると同時に水中の栄養塩類が少ない貧栄養湖でもある。栄養塩類が少ないために魚の餌になるプランクトンも少ないという「水清ければ魚棲まず」を地で行くような湖である。それだけに放流尾数が多いと魚の成長に影響が現れると考えるのは当たり前のことかも知れない。しかし、今回の場合はやせた魚の原因を直ちに放流魚が多いことによる餌不足と決めつけることには抵抗があった。それは、たしかに湖岸を遊泳するヒメマスにはやせた魚が多かったが、集荷場に揚がるヒメマスがやせているという話は全く聞かれなかったからである。もし本当に餌が不足しているのなら集荷場に集まるヒメマスも同じようにやせているはずである。

そこでそれを確かめるために青森県内水面水産試験場において、湖岸を回遊するヒメマスと沖合のヒメマスをそれぞれ捕獲していただいた²⁾。その結果、平成8年（1996年）7月5日と11日に投網等で捕獲した和井内の湖岸を回遊するヒメマス83尾と7月13日に和井内の沖合の刺網で捕獲したヒメマス200尾の体長と体重を測定することが出来た。

図-1は沖合漁獲魚と湖岸回遊魚の体長と肥満度（太り具合を表す尺度。数値が高いと太っていることを、低いとやせていることを示す。）を示したものである。

沖合で漁獲されたヒメマスに比べると湖岸の回遊魚は小型で（沖合のヒメマスより平均体長で2センチ小さい）明らかにやせていた（同じ体長のヒメマスの体重を100とすると60しかない）。この結果、やせた魚はこの時期に湖岸の浅瀬を回遊する一部の魚だけに特異的に見られるもので、漁獲の主群である沖合のヒメマスには見られないことが明らかになった。つまり、ヒメマスの主群で見る限り餌不足の状態の兆候は認められないことが判明した。限られた調査だったので平成7年（1995年）と8年に湖岸の浅瀬を回遊するヒメマスが多数出現した原因は判らなかったが、やせたヒメマスが湖岸の回遊魚だけで、漁獲されるヒメマスはいつもの年と変わらないことが確認できたのである。

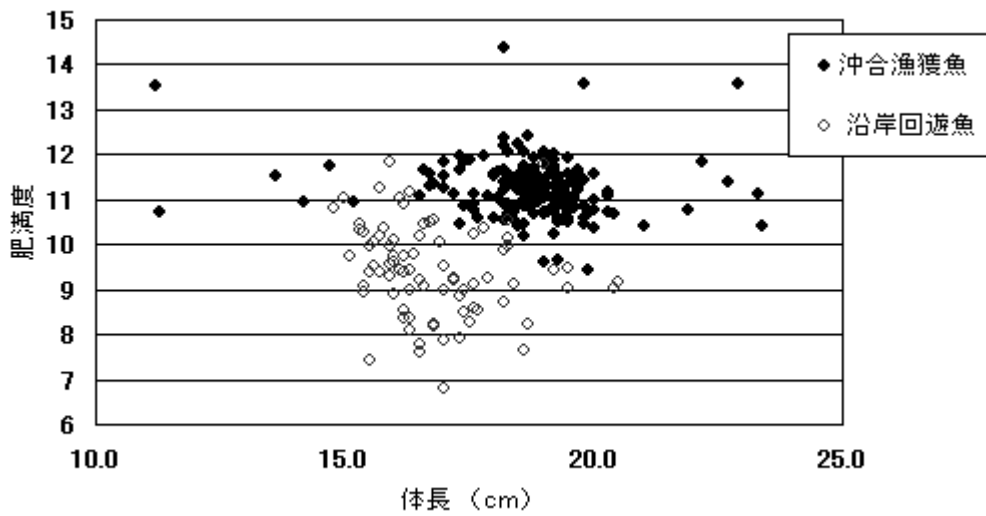


図-1 湖岸回遊魚と沖合漁獲魚の比較

(文献)

- 1) 十和田湖ふ化場協議会 1981：十和田湖資源対策事業報告書（昭和42年～55年度調査結果の総括）
- 2) 平成9年度十和田湖資源対策会議資料

平成10年（1998年）のヒメマス漁は平成9年に続いて豊漁で、8月の1ヶ月間だけで9.5トンが集荷場に水揚げされた。この量は不漁が続いた平成4年（1992年）から平成8年（1996年）の年間漁獲量の2倍から4倍に近い量であり、平成元年（1989年）以来の豊漁だった。

十和田湖ではヒメマスの漁獲量が多い年は秋の回帰親魚数が多いという年がよくあるので、秋には例年に比べて多数の親魚が回帰してくることが期待されていた。

そして産卵期となり9月10日から親魚を捕獲するための地びき網漁が始まったが、下旬から捕獲量が増え始め、10月になると一網で2千尾から3千尾という採捕が連日続くようになった。十和田湖増殖漁協の組合長さんが「網を入れれば入れるだけ獲れる」と嬉しい悲鳴を上げるほどの豊漁で採卵用の蓄養池はたちまち満杯になり、収容しきれない親魚はそのまま出荷されるほどだった。ふ化場の水路に重なるようにして次々と押し寄せるヒメマスの姿は壮観で、そのことがニュースとしてテレビや新聞等にも取り上げられた。下の写真は10月7日の読売新聞に掲載された写真と記事である。

結局平成10年（1998年）の親魚捕獲尾数は史上空前の85,000尾になったが、これはそれまで最多記録だった平成元年（1989年）の記録28,646尾の3倍に相当する尾数である。これを見てもこの年の親魚が如何に多かったかがよく判る。

しかしこの大量回帰も翌平成11年（1999年）の11,283尾と2年続いただけで、その後は平成12年（2000年）1,312尾、平成13年（2001年）2,346尾、平成14年（2002年）1,132尾とこれまでの最低水準に近い状態が続いた。



写真：1998年10月7日（水）の読売新聞1面記事（左）と記事に掲載された写真（右）

写真提供：読売新聞社

和井内貞行の「われ幻の魚を見たり」の話を初めて聞いた時、かつては魚も棲まなかったという十和田湖にいきなりヒメマスの稚魚を放流したことについて、成功を確信していたという信念の強さに驚くと同時に、無謀とさえ思えるその行動力に何か言いようのない凄さを感じたものだった。

それにしても、本当に何の予見も伏線も無いままヒメマスを放流したのだろうかという疑問が心の隅にかすかに残っていた。

それだけに今回の資料調査で明治 39 年度秋田県水産試験場報告の中にある十和田湖鱒孵化に関する調査に「和井内ハ日光中宮祠湖ノ實況ニ依リ獨リ確信スルトコロアリシヲ以ッテ」という一節を見た時は、闇雲に放流したのではないことが判って何かほっとすると同時に長年の疑問も氷解したのである。ここに出てくる中宮祠湖は中禅寺湖の別名で十和田湖同様かつては魚が棲んでいなかったといわれた湖である。中禅寺湖には明治 15 年（1882 年）にビワマス卵 12 万粒が、明治 17 年（1884 年）にサクラマス卵 23 万 2 千粒が移殖されて、明治 19 年（1886 年）には初めての産卵親魚から 7 万粒が採卵されている¹⁾。和井内貞行はこのような中禅寺湖でのビワマスとサクラマスの移殖の成功を見て十和田湖への放流の意を決したのであろう。明治 34 年（1901 年）には中禅寺湖からこの鱒卵を取り寄せて 3 万 5 千粒を十和田湖に放流している²⁾。ヒメマスの放流より 2 年前のことである。

一方、十和田湖に適する増殖魚種を探索していた青森県の関係者は、明治 27 年（1894 年）から明治 29 年（1896 年）にかけて行われた阿寒湖から支笏湖へのヒメマスの移殖が成功したことを知って十和田湖への移殖を試みることにしたのである³⁾。青森県がヒメマスに深い関心を寄せていたことは明治 35 年度青森県水産試験場報告の中にヒメマスの生態や支笏湖への移殖の経緯が詳しく記載されていることでも明らかである。その中に「県下各湖沼ヲ調査シタルニ十和田湖ハ該魚ノ性質上最モ適當ト認ムル」とあり、青森県としても十和田湖への移殖に積極的だったことが判る。その後、十和田湖の養魚関係者にヒメマスの移殖が有望であると勧めたところ和井内貞行から 3 万粒を購入したいと出願があったので、明治 35 年（1902 年）12 月、青森県水産試験場の主任が支笏湖から運搬してきたヒメマス卵の内の 3 万粒を青森港で和井内貞行に引き渡したことが記載されている⁴⁾。

このように十和田湖のヒメマスの成功は勿論それを実行した和井内貞行の熱意と努力によるものであるが、青森県の関係者による積極的な施策に負うところが少なくないことも明らかになった。

当時カパチェッポと称していたこの魚がヒメマスと呼ばれるようになったそれより後の明治 41 年（1908 年）の北海道庁告示で定められてからという⁵⁾。

(文献)

- 1) 田中甲子郎 (1967) : 淡水区水産研究所資料B10.
- 2) 明治 39 年度秋田県水産試験場報告 (1906)
- 3) 徳井利信 (1984) : 十和田湖漁業史.
- 4) 明治 35 年度青森県水産試験場報告 (1902)
- 5) 寺尾俊郎 (1967) : ヒメマス。養殖講座、緑書房。